

一、午后の授業

先生は、黒板に吊した大きな黒い星座の図の、上から下へ白くけぶった銀河帯のようなどころを指しながら、みんなに問いをかけました。

「では、みなさんは、そういうふうには、川だと云われたり、乳の流れたあとだと云われたりしていたこのぼんやりと白いものがほんとうは何かご承知ですか。」

カムパネルラが手をあげました。それから四五人手をあげました。ジョバンニは手をあげようとして、やめました。あれがみんな星だと、いつか雑誌で読んだのですが、このごろ毎日、教室でもねむく、本を読むひまもないので、どんなこともよくわからないという気持ちがあるのでした。

「ジョバンニさん。あなたはわかっているのでしょうか。」

ジョバンニは勢いよく立ちあがりましたが、立って見ると、もう答えることができません。ザネリが前の席からふりかえって、くすつとわらいました。ジョバンニはどぎまぎしてまっ赤になってしまいました。

「大きな望遠鏡で銀河をよつく調べると銀河は大体何でしょう。」

やっぱり星だとジョバンニは思いましたが、こんども答えることができません。

先生は困ったようすで眼をカムパネルラの方へ向けました。

「では、カムパネルラさん。」

すると、あんなに元気に手をあげたカムパネルラが、もじもじ立ち上ったまま答えができませんでした。

先生は意外なようにしばらくカムパネルラを見ていましたが、「では。よし」と云いながら、自分で星図を指しました。

「このぼんやりと白い銀河を、大きい望遠鏡で見ますと、たくさん小さな星に見えるのです。ジョバンニさん、そうでしょう。」

ジョバンニはまっ赤になってうなずきました。眼には涙がいっぱいでした。

（そうだ僕は知っていたのだ、もちろん、カムパネルラも知っている。いつかカムパネルラのうちでいっしょに読んだ雑誌のなかにあったのだ。）

カムパネルラが、お父さんの書斎から大きな本をもってきて、「ぎんが」というところをひろげ、まっ黒なページいっぱい白い点々のある美しい写真を見たのでした。

（カムパネルラが忘れるはずもないのに、返事をしないのは、ぼくがこのごろ仕事がつらくて、学校に出てもみんなと遊ばないのを気の毒がったからだ。）

先生はまた云いました。

「ですから、この天の川を川だと考えるなら、一つ一つの小さな星はみんな川の底の砂や砂利の粒にあたるわけです。また、これを、大きな乳の流れと考えるなら、星はみな乳のなかに細かに浮かんでいる油脂の球にあたるのです。そんなら、何がその川の水にあたるかと云いますと、それは光をある速さで伝える真空というもので、太陽や地球もやっぱりそのなかに浮んでいます。わたしども、天の川の水のなかに棲んでいるわけ

です。そして、そのなかから四方を見ると、ちょうど水が深いほど青く見えるように、天の川の底の深く遠いところほど星がたくさん集って見え、したがって、白くぼんやり見えるのです。この模型をごらん下さい。」

先生は、光る砂のつぶのたくさん入った大きな両面凸レンズを指しました。

「天の川の形は、ちょうどこんなです。いちいちの光るつぶがみんな、じぶんで光っている星だと考えます。太陽がほぼ中ごろにあつて、地球がすぐ近くにあるとします。みなさんが夜、このまん中に立ってレンズの中を見まわすとしてごらん下さい。こつちの方はレンズが薄いので、わずかの光る粒すなわち星しか見えませんのです。こつちやこつちの方は厚いので、星がたくさん見え、遠い星は、ぼうつと白く見えるという、これがつまり今日の銀河の説なのです。そんなら、このレンズの大きさがどれ位あるか、またさまざまの星については、もう時間ですから、この次の理科の時間にお話します。今日は、その銀河のお祭なのですから、みなさんは外へ出てよく空をごらん下さい。では、ここまでです。本やノートをおしまい下さい。」

そして、教室中はしばらく机の蓋をあげたりしめたり、本を重ねたりする音がいつぱいでしたが、まもなくみんなは、きちんと立って礼をすると教室を出ました。

二、活版所

ジョバンニが学校の門を出るとき、同じ組の七八人が、カムパネルラをまん中にして校庭の隅の桜の木の下に集まっていました。今夜の星祭で、青いあかりをつけて川へ流す烏瓜を取りに行く相談らしかったのです。

けれどもジョバンニは、手を大きく振ってどしどし学校の門を出て来ました。町の家々では、いちいちの葉の玉をつるしたり、ひのきの枝にあかりをつけたり、銀河の祭の仕度をしていました。

ジョバンニは町の角を三つ曲がって、大きな活版所にはいつてゆきました。入口の計算台にいるだぶだぶの白いシャツを着た人にお辞儀をしてから靴を脱いで上がりました。突き当たりの扉を開けると、まだ昼間なのに中には電灯が点いていて、たくさんの輪転機がばたりばたりと回っています。きれで頭をしばった人たちが大ぜい歌うように読んだり数えたりしながら働いておりました。

ジョバンニが、入口から三番目のテーブルの人におじぎをすると、その人は棚をながめてから一枚の紙切れを渡しました。

「これだけ拾って行けるかね。」

ジョバンニは小さな平たい函をとりだして、壁の隅の植字台の前へしやがみ込むと、小さなピンセットで粟粒ぐらいの活字を次から次と拾いはじめました。

青い胸当てをした人が、後ろを通りながら、

「よう、虫眼鏡君、お早う。」といひますと、近くの四、五人が声も立てずに冷たく笑いました。

ジョバンニはなんべんも目をぬぐいながら活字を拾いました。

六時が打ってから、ジョバンニは拾った活字をいっばいに入れた平たい箱を、手にもった紙きれと引き合せました。それから、受付へ持って行って渡すと、扉を開けて計算

台のところで銀貨を一つ受け取りました。ジョバンニは俄かに顔いろがよくなって、威勢よくおじぎをすると、おもてへ飛びだしました。

それから、パン屋へ寄って、パンの塊を一つと角砂糖を一袋買いますと一目散に走りだしました。

三、家

ジョバンニが勢よく帰って来たのは、裏町の小さな家でした。入口の空き箱には紫いろのケールやアスパラガスが植えてあります。小さな二つの窓には日覆いが下りたままでした。

ジョバンニは靴をぬぎながら云いました。

「お母さん。いま帰ったよ。工合悪くなかったの。」

「今日は涼しくてね。ずうっと工合がいいよ。ジョバンニ、お仕事がひどかったろう。」

「お母さんはすぐ入口の室に白い巾を被って寝んでいます。ジョバンニは窓をあけました。」

「お母さん。今日は角砂糖を買ってきたよ。牛乳に入れてあげようと思って。姉さんはいつ帰ったの。」

「三時ころ帰ったよ。みんなそこらをしてくれてね。」

「お母さんの牛乳は来ていないんだろうか。」

「来なかつたらうかねえ。」

「ぼく、とって来よう。」

「あたしはゆつくりでいいんだから。姉さんがね、トマトで何かこしらえてそこへ置いて行ったよ。お前さきにおあがり。」

「では、食べよう。」

ジョバンニは窓ぎわの棚からトマトの皿をとって、パンといっしょにむしゃむしゃたべました。

「ねえお母さん。ぼく、お父さんはきつと、間もなく帰ってくると思うよ。」

「あたしもそう思う。おまえは、どうしてそう思うの。」

「今朝の新聞に、今年は北の方の漁は大へんよかつたと書いてあったよ。」

「だけどねえ、お父さんは漁へ出ていないかもしれない。」

「きつと出ているよ。お父さんが監獄へ入るような悪いことをした筈がないんだ。この前お父さんが持ってきて学校へ寄贈した巨きな蟹の甲らだのトナカイの角だの、今だつてみんな標本室にあるんだ。」

「この次はおまえにラッコの上着をもつてくるといったねえ。」

「みんながぼくにそれを云うよ。ひやかすように云うんだ。」

「悪口を云うの。」

「うん、けれども、カムパネルラは決して云わない。みんなが云うときは気の毒そうにしている。」

「あの人のお父さんとうちのお父さんとは、おまえたちのように小さいときからお友達

だったそうだよ。」

「お父さんは、ぼくをカムパネルラのうちへもつれて行ったよ。あのころはよかったなあ。学校から帰る途中、たびたびカムパネルラのうちに寄った。アルコールラムプで走る汽車があつたんだ。レールを七つ組み合せると円くなって、電柱や信号標もついている。アルコールがなくなつて石油をつかったら、罐がすっかり煤けたよ。」

「そうかい。」

「いまも毎朝、新聞を配りに行くけれど、いつでも家中しいんとしている。」

「早いからねえ。」

「ザウエルという犬がいるんだ。しっぽが箒のようで、ぼくが行くと鼻を鳴らしてついてくる。今夜はみんなで烏瓜のあかりを川へながしに行くんだつて。きつと犬もついて行くよ。」

「そうだ。今晩は銀河のお祭だねえ。」

「ジョバンニ」うん。ぼく牛乳をとりながら見てくる。」

「行つておいで。川へは、はいらないでね。」

「うん、岸から見ただけだよ。一時間で行つてくる。」

「もつと遊んでおいで。カムパネルラさんと一緒なら心配ないから。」

「きつと一緒だよ。窓をしめて置こうか。」

「ああ、どうか。もう、涼しいからね。」

「では一時間半で帰つてくるよ。」

「ジョバンニは立つて窓をしめ、お皿やパンの袋を片附けると、靴をはいて勢いよく暗い戸口を出ました。」

四、ケンタウル祭の夜

「ジョバンニは、檜のまつ黒にならんだ町の坂を下りて来ました。坂の下には、一本の大きな街燈が青白く光つて、立っていました。ジョバンニの影法師が、だんだん淡く黒くなつて、足をあげたり、手を振ったりして、横に回つてきました。」

「ジョバンニがちょうど街燈の下に来たとき、えりの尖つた新しいシャツを着たザネリが、暗い小路の向こうから出て来ました。」

「ザネリ、烏瓜ながしに行くの。」

「ジョバンニが言い切らないうちに、ザネリが投げつけるように叫びました。」

「ジョバンニ、お父さんから、らっこの上着が来るよ。」

「ジョバンニは、ぼつと胸がつめたくなり、そこら中きいんと鳴るようでした。」

「何だい。ザネリ！」

「ジョバンニは高く叫び返しましたが、ザネリはもう向こうの家の中へはいってしました。」

「(ザネリは、どうしてあんなことを云うんだ。ぼくがなんにもしないのに。ザネリはばかなんだ。)」

「ジョバンニは、さまさまの灯や木の枝できれいに飾られた街を通つて行きました。時計屋の店には明るくネオン燈がついていました。海のような色の厚い硝子盤に載つ

たいろいろな宝石が星のようにゆつくり循めぐっています。ふくろうの赤い目がくるくるつと動いたり、銅の人馬がこつちへまわつて来たりします。

まん中には円く黒い星座早見が、アスパラガスの緑の葉で飾ってありました。

ジョバンニはわれを忘れて、星座の図に見入りました。

日にちと時刻に合わせて盤をまわすと、空が楕円形のかたちにあられるようになっていきます。まん中には、ぼうとけむつた銀河が、上から下へ帯になつて湯気でもあげているように見えました。

店の奥には三本脚の望遠鏡が黄いろく光つて立ち、壁には、獣や蛇や魚うおや瓶びんの形を書いた大きな星図がかかつていました。

(ほんとうに、こんな蝸かだの勇士だのが、空に居るのだろうか。ぼくは、そんなところを、どこまでも歩いて見たい)

そのとき、ジョバンニはお母さんの牛乳のことを思いだして、その店をはなれました。町の通りには澄みきつた空気が水のように流れています。街燈はみな、もみや檜かの枝で包まれています。電気会社の前の六本のプラタナスの木には、たくさんたの豆電燈がついて、そこらはまるで人魚の都のようでした。

子どもらはみんな、新しい着物を着て、星めぐりの口笛を吹いたり、「ケンタウルス、露をふらせ」と叫んで走つたり、青いマグネシヤの花火を燃したりして遊んでいます。

ジョバンニは深く首を垂れて牛乳屋へ急ぎました。そうしていつか、ポプラの木が幾本も高く星ぞらに浮んでいる町はずれに来ていました。

牛乳屋の黒い門を入ると、うす暗い台所の前に立つて帽子をぬぎました。

「今晚は。」

家の中はしーんとしています。

「今晚は、ごめんなさい。」

しばらくたつてから、年老とつた女の人が、工合悪そうにそろそろ出て来て「何か用ですか」と云いました。

「今日、牛乳が僕んとこへ来なかつたので、貰いにあがつたんです。」

「いま誰もいないので、わかりません。あしたにして下さい。」

女の人は赤い眼の下をこすりながら言いました。

「おつかさんが病氣なんです。今晚でないと困るんです。」

「ではもう少したつてから来てください。」

「そうですか。では、ありがとう。」

ジョバンニは、お辞儀をして台所から出ました。

ジョバンニが、十字になった町のかどを曲がろうとしましたら、六、七人の生徒らがやってきました。めいめい烏瓜の燈火を持って、口笛を吹いたり笑ったりしています。

同級生たちでした。ジョバンニはどきつとして戻ろうとしましたが、思い直して勢よくそつちへ歩いて行きました。

「川へ行くの。」とジョバンニが云おうとしたとき、ザネリがまた叫びました。

「ジョバンニ、らつこの上着が来るよ。」

みんなが続いて叫びました。

「ジョバンニ、らっこの上着が来るよ。」

ジョバンニはまつ赤になつて、急いで行きすぎようとなりました。すると、そのなかにカムパネルラが居たのです。カムパネルラは何も言わず、気の毒そうにジョバンニを見ました。

ジョバンニは、その眼を避けました。みんなが通り過ぎてから振り向くと、ザネリがやはり振り返っていました。

ジョバンニはなんとも云えずさびしくなつて、いきなり走り出しました。

五、天気輪の柱

ジョバンニは黒い丘へ向かつて急ぎました。まつくらのなやぶのしげみの間を、小さなみちが一すじ、白く星あかりに照らされていました。ジョバンニは、どんどんのぼつて行きました。草の中には、ぴかぴか光る虫がいて、草の葉を青くすかしています。ジョバンニは、烏瓜の明かりのようだと思いました。

まつ黒な松や檜の林を越えると、俄かにがらんと空がひらけて、南から北へ天の川が横たわっていました。丘の頂には、天気輪の柱が見えました。鳥が一匹、鳴きながら丘の上を通り過ぎました。

ジョバンニは、頂上の天気輪の柱の下に来て、どこどかするからだを、つめたい草に投げました。

風が遠くで鳴り、丘の草はしずかにそよいでいます。汗でぬれたジョバンニのシャツもつめたく冷されました。ジョバンニは町はずれから遠くへ広がる黒い野原を見わたしました。

すると、汽車の音が聞えてきました。一列に並んだ列車の窓の中で、旅人たちが苹果の皮を剥いたり、わらったりしていると思うと、ジョバンニは何とも云えずかなしくなつて、また眼をそらにあげました。

(ああ、あの白いそらの帯がみんな星だというのか。)

しかし、その空は、先生の云うようながらんとした冷たいところだとは思われません。見れば見るほど、小さな林や牧場のある野原のようでした。

青い琴の星が三つにも四つにもなつて、ちらちら瞬きました。そして、なんべんも脚を出したり引つ込めたりして、とうとう草のような長く延びました。足もとの町の灯りまでが、たくさんの星の集まりか、大きなけむりのように見えました。

六、銀河ステーション

そのとき、ジョバンニは、天気輪の柱が三角標の形になつて、蛍のように、ぺかぺか消えたりもつたりするのを見ました。それがだんだんはつきりして、青い鋼の板のような空の野原に、まつすぐに立ちました。

すると、どこかで「銀河ステーション、銀河ステーション」と云うふしぎな声が出たと思うと、いきなり眼の前が、ぱつと明るくなりました。

ジョバンニは何べんも眼を擦りました。気がつくと、ごとごとごとごと、ジョバンニ

の乗っている小さな列車が走りつづけていたのです。ジヨバンニは、夜の軽便鉄道の、小さな黄色い電燈のならんだ車室に座っていました。青い天蚕絨を張った腰掛けはがら明きで、鼠いろのワニスを塗った壁には、真鍮の大きなぼたんが二つ光っているのです。

すぐ前の席に、ぬれたようにまっ黒な上着を着た、せいの高い子供が、窓から頭を出して外を見ていました。肩のあたりが、どうも見たことのあるような気がします。誰だか知りたくなりました。

すると、その子が頭を引っ込めて、こつちを見ました。それはカムパネルラだったのです。

「みんなはね、ずいぶん走ったけれども、遅れてしまった。ザネリもね、ずいぶん走ったけれども追いつかなかった。」

（そうか、ぼくたちは今、いつしよにさそって出掛けてきたのか？）と思いながら、ジヨバンニは云いました。

「どこかで待っていいようか？」

「ザネリは、もう帰ったよ。お父さんが迎いにきたんだ。」

カムパネルラは顔いろが青ざめて、どこか苦しそうでした。ジヨバンニも、どこかに何か忘れたものがあるような気がしました。

カムパネルラは、もうすっかり元気が直って、勢よく云いました。

「しまった。水筒を忘れてきた。スケッチ帳も忘れた。けれど構わない。もうじき白鳥の停車場だから。ぼく、白鳥を見るのが好きなんだ。遠くにいたって、きつと見つける。」

カムパネルラは、円い板のような地図をぐるぐるまわして見えています。まっ黒い盤には、天の川の岸に沿って一条の鉄道線路が書かれています。停車場や三角標や泉や森は、青や橙や緑の美しい光でちりばめられています。ジヨバンニは、どこかでその地図を見たような気がしました。

「この地図はどこで買ったの。」

「銀河ステーションで、もらったんだ。君、もらわなかったの。」

「ぼく、銀河ステーションを通つたろうか。いまぼくたちの居るところ、ここだろう。」

ジヨバンニは、「白鳥」と書いてある停車場のすぐ北を指しました。

「そうだ。おや、あの河原は月夜だろうか。」

ジヨバンニがそつちを見ますと、青白く光る銀河の岸に、銀いろのすすきがいちめん、風にさらさらゆられて波を立てています。

「月夜でないよ。銀河だから光るんだよ。」

ジヨバンニははね上りたいくらい愉快になって、窓から顔を出して、口笛で星めぐりの歌を吹きました。

そして、天の川の水を見きわめようとなりました。水は、ガラスよりも水素よりもすきとおっています。ちらちらと紫いろのこまかな波をたてたり、虹のようにぎらっと光ったりしながら、音もなく流れて行きます。

野原のあちこちに、燐のように光る三角標が、うつくしく立っています。遠いものは小さく、近いものは大きく、遠いものは橙や黄いろではっきりし、近いものは青白く少

しかすんでいます。あるいは三角形、あるいは四辺形、あるいは電や鎖の形、さまざまにならんで、野原いっぱい光っているのです。

ジョバンニはどきどきして、やけに頭を振りまわした。すると、青や橙にかがやく野原中の三角標が、てんでに息をつくように、ちらちらゆれたり顫えたりしました。

「もう、天の野原にきたね。でも、この汽車、石炭をたいていないねえ。」

ジョバンニが左手を突き出して前を見ながら言いました。

「アルコールか電気だろう。」

列車はごとごと走ってゆきます。三角標の列は燃えるように光って立ちました。

「あつ、りんどうの花が咲いている。」

線路のへりのみじかい芝草の中に、月長石で刻まれたような紫のりんどうの花が咲いていました。

「ぼく、飛び下りて、あいつをとって、また飛び乗ってみせようか。」

ジョバンニが胸おどらせて言いました。

「もうだめだ。あんなにうしろへ行ってしまった。」

すると、次から次へと湧くように、底の黄色いりんどうの花のコップが、眼の前を通りすぎてゆきました。

そのとき、カムパネルラがいきなり、思い切ったように急ぎこんで云いました。

「おっかさんは、ぼくをゆるして下さいさるだろうか。」

ジョバンニははっとしました。(ああ、そうか、ぼくのおっかさんも、あの橙いろの三角標のあたりにいらっしやって、いまぼくのことを考えているんだ。)

カムパネルラは泣きだしたいのを一生けん命こらえているようでした。

「ぼくはおっかさんが、ほんとうに幸になるなら、どんなことでもする。けれども、いったいどんなことが、いちばんの幸なんだろう。」

ジョバンニはびっくりして叫びました。

「きみのおっかさんは、なんにもひどいことは、ないじゃないか。」

「ぼくわからない。けれども、誰だって、ほんとうにいいことをしたら、いちばん幸運だ。だから、おっかさんは、ぼくをゆるして下さいさると思う。」

カムパネルラは、なにか決心をしたように見えました。すると、車内が、ぱつと明るくなりました。きらびやかな銀河の河床の上を、水は声もかたちもなく流れています。

まん中には青白く後光の射した島が見えました。

島のいただきには、立派な白い十字架が、金いろの円光をいただいて立っていました。すると、「ハルレヤ、ハルレヤ」という声が、前からもうしろからも起こりました。

車室の旅人たちは、黒いバイブルを胸にあてたり、水晶の珠数をかけたり、指を組み合せたりして祈っているのです。

二人も立ちあがりました。カムパネルラの頬は、熟した苹果のようにつくつくかがやきました。ジョバンニのうしろには、黒いかつぎをした背の高いカトリック風の尼さんが、まん円な緑の瞳をじつと落して、虔んで何かを聴いているように見えました。

島と十字架とは、だんだんうしろの方へうつって行きました。旅人たちは席に戻りました。二人は悲しみに似た新しい気持で胸がいっぱいでした。

七、北十字とプリオシン海岸

「もうじき白鳥の停車場だねえ。」

「ああ、十一時かつきりに着くんだよ。」

汽車はだんだんゆるやかになって、白鳥停車場の大きな時計の前でとまりました。

盤面の二本の針は十一時を指し、時計の下に「二十分停車」と書いてありました。

みんなは一ぺんに下りて、車室の中はがらんとなくなってしまいました。

「ぼくたちも降りて見ようか。」

「降りよう。」

二人はかけて行きました。改札口には、紫の電燈が一つ点いているばかりで、駅長も赤帽の影もありませんでした。

二人は、停車場の前の小さな広場に出ました。水晶細工のような銀杏の木に囲まれています。そこからまっすぐに、幅の広い道が、銀河の青い光の中へ向かっていました。

さきに降りた人たちは、どこへ行ったのか、ひとりも見えませんが、二人が肩をならべて歩いてゆきますと、汽車から見えたきれいな河原にきました。

カムパネルラは、きれいな砂を一つまみ拾い上げると、掌にひろげて、指できしきしさせました。

「この砂はみんな水晶だ。中で小さな火が燃えている。」

「そうだ。」

(どこでぼくは、そんなことを習ったろうか) と思いながら、ジョバンニは答えました。

河原の礫は、みんなすきとおっています。水晶や黄玉や鋼玉やらでした。

ジョバンニは走って渚へ行き、水に手をひたしました。銀河の水は、水素よりもっとすきとおっていました。水にひたった手首が、水銀いろに浮いたように見え、手首にぶっつかった波は、燐光をあげて、ちらちら燃えるようでした。

川上には、すすきのいっぱい生えた崖の下に、川に沿って白い岩が運動場のようになっていました。五、六人の人かげが、何か掘り出しているらしく、手にした道具が時どきピカッと光りました。

「行ってみよう。」

二人は走りだしました。白い岩の入口に「プリオシン海岸」と、つるつるした瀬戸物の標札が立って、渚には細い鉄の欄干が植えられ、木製のベンチも置いてありました。

カムパネルラが岩の中から黒くて細長いくるみの実のようなものを拾いました。

「くるみの実だよ。たくさんある。流れて来たんじゃない。岩の中に入ってるんだ。」

「大きいね、このくるみ。倍あるね。すこしもいたんでない。」

「あそこへ行ってみよう。何か掘ってるから。」

二人は近よって行きました。

ひどい近眼鏡をかけ、長靴をはいた背の高い学者らしい人が、手帳に何か書きつけながら、三人の助手にせわしく指図をしていました。

「その、その突起を壊さないように。スコープを使いたまえ、スコープを。おっと、もう少し遠くから掘って。いけない、いけない。なぜそんな乱暴をするんだ。」

大きな獣けものの青白い骨が、横に倒れて潰れたという風に、半分以上掘り出されています。そこらには、蹄のついた足跡のある岩が十ばかり、四角に切り取られて番号がつけられています。

「君たちは参観かね。くるみが沢山あったろう。ざっと百二十万年前のくるみだよ。ごく新しい方さ。ここは第三紀のころには海岸でね、この下からは貝がらも出る。いま川の流れているところに、そっくり塩水が寄せたり引いたりしていたのだ。このけものかね、これはボスといってね、おいおい、つるはしはよしたまえ。ていねいに鑿うでやってくれたまえ。ボスといってね、いまの牛の先祖で、昔はたくさん居たさ。」

「標本にするんですか。」

「いや、証明するのに要するんだ。ここは厚い立派な地層で、ぼくらからみると、百二十万年前にできたという証拠もいろいろあがるけれども、ほかのやつからみても、やっぱりこんな地層に見えるかどうかということなのだ。わかったかい。けれども、おいおい、そこもスコップではいけない。すぐ下に肋骨が埋もれてる筈じゃないか。」

学者はあわてて走って行きました。

カムパネラが地図と腕時計とを見くらべて云いました。

「もう時間だよ。行こう。」

ジョバンニは、ていねいに学者におじぎしました。

「では、わたくしどもは失礼いたします。」

「そうですか。いや、さよなら。」

学者は、また忙がしそうに歩きまわって監督をはじめました。

二人は白い岩の上を、汽車におくれないように一所けん命走りました。息も切れず膝もあつくありませんでした。

こんなにかけてかけるなら、もう世界中だつてかけられると、ジョバンニは思いました。間もなく二人は、もとの席に座って、いま行ってきた方を、窓から見っていました。

八、鳥を捕る人

「ここへかけてもようございますか。」

二人のうしろで、がさがさしているけれども、親切そうな声がしました。

「ええ、いいです。」

ジョバンニは、少し肩をすぼめて挨拶しました。

白い巾で包んだ二つの荷物を肩に掛けた人です。ぼろぼろの茶色い外套を着て、背中のかがんだ赤髯あかひげの人でした。かすかに笑いながら、荷物をゆっくりと網棚にのせました。

ジョバンニは、かなしいような気持ちで正面の時計を見ていました。すると、ずうつと前の方で、硝子の笛が鳴りました。

汽車はもう静かに動いていました。赤ひげの人はなつかしそうに笑いながら、二人のようすを見えています。

汽車はだんだん早くなって、すすきと川とが、かわるがわる窓の外に光りました。

赤ひげの人がおぼおぼしながら訊きました。

「あなた方は、どちらへいらっしゃるんですか。」

「どこまでも行くんです。」

ジョバンニはきまり悪そうに答えました。

「それはいいね。この汽車は、どこまでも行きませぬ。」

「あなたはどこへ行くんです。」

カムパネルラが、喧嘩のようにたずねましたので、ジョバンニは、思わずわらいました。

すると向こうの席で、尖った帽子をかぶり、大きな鍵を腰に下げた人も、こつちを見て笑いましたので、カムパネルラもつい笑ってしまいました。ところが赤ひげの人は別に怒ったようすもありません。

「わっしはすぐそこで降ります。わっしは鳥をつかまえる商売でね。」

「何鳥ですか。」

「鶴や雁です。さぎも白鳥もです。」

「どうやって捕るんですか。」

「鶴ですか、それとも鷺ですか。」

「鷺です。」

ジョバンニは、どっちでもいいと思いました。

「そいつはな、雑作ない。さぎというものは、天の川の砂が凝って、ぼおつとできるもんですからね。そして、川へ帰りますからね。川原で待っていて、下りてくる脚を、地べたへつくつかないうちに、ぴたつと押えちまうんです。するともうかたまって、安心して死んじまいます。あとは押し葉にするだけです。」

「標本ですか。」

「標本じゃありません。みんな食べるじゃありませんか。」

「おかしいねえ。」

「おかしいも何ありません。そら。」

男は立ちあがって網棚から包みをおろすと、手ばやくくると解きました。

「さあ、ごらんなさい。いまとって来たばかりです。」

「ほんとうに鷺だねえ。」

二人は叫びました。

北の十字架のように真っ白い鷺が十ばかり、平べったくなって、黒い脚をちぢめて、浮彫うきぼりのようにならんでいます。頭の上の槍のような白い毛もちゃんといっています。

「眼をつぶってるね。」

カムパネルラは、三日月がたの白い眼に指でそつとさわりました。

「ねえ、そうでしょう。」

鳥捕りは風呂敷を重ねて、またくるくると包んで紐でくくりました。ジョバンニは、いったい誰がここで、鷺なんぞ喰べるのだろうかと思いました。

「鷺はおいしいんですか。」

「ええ、毎日注文があります。しかし雁の方が、もっと売れます。柄がいいし、第一手数がありませんからな。そら。」

鳥捕りは、また別の包みを解きました。すると、黄いろと青じろとまだらに光る雁が、くちばしを揃えて扁べったくなくて、ならんでいました。

鳥捕りは、黄色い雁の足を、軽くひっぱりました。すると、チョコレートでもできているように、すつときれいにはなれました。

「どうです。すこしたべてごらんなさい。」

鳥捕りは、それを二つにちぎってわたしました。ジヨバンニは、ちよつと喰べてみました。

(なんだ、やっぱりこいつはお菓子だ。チョコレートよりもおいしいけれど、こんな雁が飛んでいるもんか。この男は、そこらの菓子屋だ。ああ、ぼくは、この人をばかにしながら、この人のお菓子を食べている。)

「こいつは鳥じゃない。ただのお菓子でしょう。」

「そうそう、ここで降りなけあ。」

鳥捕りはあわてて立って、荷物を取ったと思うと、もう見えなくなっていました。

「どこへ行ったんだろう。」

二人は窓の外をのぞきました。鳥捕りは河原ハハコグサの中に立って、まじめな顔で両手をひろげ、じつとそらを見ています。

「あすこへ行ってる。きつとまた鳥をつかまえるとこだ。早く鳥がおけるといいな。」

と云った途端、桔梗いろの空から、まるで雪の降るように、鷺がぎやあぎやあ叫びながら、いっぱい舞いおりて来ました。

鳥捕りはほくほくして、鷺のちぢめた黒い脚を両手で片っ端から押えて、布の袋に入れるのでした。鷺は、袋の中で蛍のように青くぺかぺか光ったり消えたりしましたが、しまいには、みんな白くなって、眼をつぶるのです。

ところが、鳥捕りは二十足ばかり、袋に入れてしまうと、急に両手をあげて、兵隊が鉄砲弾にあたって死ぬようなかたちをしました。

と思ったら、もう鳥捕りの形はなくなつて、ジヨバンニのとなりで、聞き覚えのある声がありました。

「ああせいせいした。からだに恰度合うほど稼いでいるくらい、いいことはありませんな。」

鳥捕りは、とつて来た鷺を、もうきちんとそろえて、一つずつ重ね直しています。

「どうしてあすこから、いっぺんにここへ来たんですか。」

ジヨバンニが聞きました。

「どうしてって、来ようとしたから来たんです。では、あなた方はどちらからおいでですか。」

ジヨバンニは、すぐに返事をしようとしたのですが、どこから来たのか、考えつきませんでした。カムパネルラも、思い出そうとして、顔を真っ赤にしました。

「ああ、遠くからですね。」

鳥捕りは、わかったというように雑作なくうなずきました。

九、ジヨバンニの切符

鳥捕りが窓の外を見て口を開きました。

「もうここらは白鳥区のおしまいです。ごらんなさい。あれが名高いアルビレオの観測

所です。」

天の川のまん中に、黒い大きな建物が四棟ばかり立っています。その一つの平屋根の上に、青宝玉と黄玉と二つの大きなすきとおった球が、輪になってくるくとまわっています。

「あれは、水の速さをはかる器械です。水も……。」

「切符を拝見いたします。」

赤い帽子をかぶったせいの高い車掌が立っていました。

鳥捕りはかくしから小さな紙きれを出しました。

車掌はちよつと見て、すぐ眼をそらして、（あなた方のは？）というように、ジョバンニたちの方へ手を出しました。

「さあ……」

ジョバンニが困ってもじもじしていましたが、カムパネルラはすぐに、鼠いろ小さな切符を出しました。

ジョバンニは、もしかして上着のポケットにでも入っていたかと、手を入れて見ましたら、畳んだ大きな紙きれにあたりました。ハガキぐらいの四つ折りの緑いろの紙でした。

何でも構わないと思って渡すと、車掌は丁寧に開きました。ジョバンニは、あれはたしかに証明書か何かだったと考えて胸が熱くなりました。

「これは三次空間の方からお持ちになったのですか。」

「何だかわかりません。」

「よろしゅうございます。南十字へ着きますのは、第三時ころになります。」

車掌はジョバンニに紙を渡して向うへ行きました。

カムパネルラは、待ち兼ねたようにその紙切れをのぞきこみました。いちめんの黒い唐草模様の中に、おかしな字を十ばかり印刷したもので、見ているとその中へ吸い込まれてしまいそうでした。

すると、鳥捕りが横からちらつと見て云いました。

「おや、こいつは大したもんですぜ。ほんとうの天上へさえ行ける切符だ。天上どこじやない、どこでも勝手にあるける通行券です。あなた方、大したもんですね。」

「何だかわかりません。」

ジョバンニはきまりが悪いので、また窓の外をながめました。鳥捕りが大したもんだというように時どきこつちを見ているのがわかりました。

「もうじき鷺の停車場だよ。」

カムパネルラが、向う岸の三つならんだ青白い三角標と地図とを見較べて云いました。ジョバンニはなんだか鳥捕りが気の毒でたまらなくなりました。

（この人のほんとうの幸になるなら、自分の持つてる食べものでもなんでもやってしまいたい。天の川の河原に百年つづけて立って、鳥をとってやってもいい。）

ほんとうにあなたのほしいものは何ですか、と訊こうとして、あんまり出し抜けだから、どうしようかと考えて振り返って見ましたら、鳥捕りはもう居ませんでした。

また鷺を捕ろうとしているのかと思って、窓の外を見ましたが、外はいちめんの砂子と白いすすきの波ばかりで、鳥捕りの広い背中も尖った帽子も見えませんでした。

カムパネルラがぼんやり云いました。

「あのどこへ行つたらう。」

ジョバンニが答えました。

「どこへ行つたらう。一体どこでまた会うのだろう。僕はどうしても少し物を言わなかつたらう。」

「僕もそう思っている。」

「僕は、あの人が邪魔な気がしたんだ。」

ジョバンニは、こんな変てこな気もちは初めてだし、今までこんなことを云ったこともないと思いました。

十 青年と二人の子ども

カムパネルラが不思議そうにあたりを見まわしました。

「何だか苹果の匂がする。ぼく、いま苹果のこと考えたためだろうか。」

ジョバンニもそこらを見ました。しかし、いまは秋だから野茨の花の匂のする筈はないと思いました。

「ほんとうだ。それから、野茨の匂もする。」

すると、そこに、六つばかりの黒い髪の男の子が、赤い上着のぼたんもかけずに、びつくりしたような顔をして、はだしでがたがたふるえて立っていました。隣りには黒い洋服を着た背の高い青年が、男の子の手を引いて立っています。

「あら、ここどこでしょう。まあ、きれいかわ。」

黒い外套を着た十二ばかりの茶いろい眼の女の子が、青年の腕にすがっていました。

「ああ、ここはランカシャーだ。いや、ぼくたちは空へ来たのだ。わたしたちは天へ行くのです。ごらんなさい。あのしるしは天上のしるしです。もうなんにもこわいことありません。神さまに召されているのです。」

黒服の青年はよろこびにかがやいて女の子に云いました。けれども、大へん疲れているらしく、無理に笑いながら、男の子をジョバンニのとなりに座らせました。

「ぼく、大姉さんのとこへ行くんだよう。」

青年は何とも云えず悲しそうな顔で、その子のぬれてちぢれた頭を見ました。それから、女の子には、カムパネルラのとなりの席を指さしました。

女の子はすなおに座りましたが、両手を顔にあててしくしく泣きだしました。

「お父さんや大姉さんは、まだいろいろお仕事があるのです。けれども、もうすぐあとからいらつしやいます。それよりも、おつかさんはどんなに永く待っていらつしやるでしょう。早く行ってお目にかかりましょうね。」

「うん、だけど僕、船に乗らなけあよかつたなあ。」

「ええ、けれど、ごらんなさい、あの立派な川。ね、あすこは、夏中、「ツインクル、ツインクル、リトル、スター」をうたつてやすむとき、いつも窓からぼんやり白く見えていたでしょう。あすこですよ。ね、きれいでしょう、あんなに光っています。」

女の子もハンケチで眼をふいて外を見ました。青年はまた云いました。

「わたしたちはもう悲しいことはないのです。こんないいところを旅して、じき神さまの

そこへ行きます。そこは明るくて匂いがよくて、立派な人たちでいっぱいです。わたしたちの代りにボートへ乗れた人たちは、みんな助けられて、自分のおうちへ行くのです。さあ、もうじきですから元氣を出しておもしろくうたって行きましょう。」

青年は男の子のぬれた黒い髪をなでながら、顔いろがだんだんかやいて来ました。さつき笑った燈台守が青年にたずねました。

「あなた方はどちらからいらつしやつたのですか。」

青年はかすかに笑いしました。

「ええ、船が氷山にぶつつかって沈みましてね。わたしたちは、こちらのお父さんが一足さきに本国へお帰りになったので、あとから発つたのです。ところが、ちょうど十二日目、船が氷山にぶつつかって一ぺんに傾き、沈みかけました。月はありませんが、霧が深かったのです。救命ボートは、とてもみんなは乗り切らないのです。わたしは必死になって、どうか小さな人たちを乗せて下さいと叫びました。近くの人たちはすぐ道を開いて、子供たちのために祈って呉れました。けれども、ボートのところまでには小さな子どもや親たちがいて、とても押しつける勇気がなかったのです。私は覚悟して、二人を抱いて、浮べるだけは浮ぼうと、船の沈むのを待っていました。誰が投げたか、ライフブイが飛んで来ましたけれども、滑って向うへ行ってしまうました。私は一生懸命で甲板の格子をはずして、三人しつかりとりつきました。どこからともなく賛美歌の声があがりました。そのとき、俄かに大きな音がして私たちは水に落ち、渦に入ったと思ひながらしつかりこの人たちをだいて、それからぼうつとしたと思つたら、ここへ来ていたのです。」

そこから小さな祈りの声が聞こえ、ジョバンニもカムパネルラも、いろいろのことを思い出して眼が熱くなりました。

（ああ、氷山の流れる北の海で、だれかが小さな船に乗って烈しい寒さと一生けんめいたたかっている。ぼくはその人が氣の毒ですまない氣がする。その人のさいわいのために、いったいどうしたらいいのだろう。）

ジョバンニは首を垂れて、ふさぎ込んでしまいました。すると、燈台守がなぐさめました。

「なにがしあわせかわからないです。どんなつらいことでも、それがただしいみちを進む中のできごとなら峠の上りも下りもみんなほんとうの幸福に近づく一あしずつです。」

青年が祈るように答えました。

「そうです。いろいろな悲しみも、いちばんのさいわいに至るためのおぼしめしです。」

二人の子どもはぐったり疲れて、めいめい席によりかかって睡っていました。

十一 鳥たちととうもろこし

（ことごとごとごとと汽車はきらびやかな燐光の川の岸を進みました。向う側の窓を見ると、野原はまるで幻燈のようでした。百も千もの大きささまの三角標、大きなものの上には赤い点をうった測量旗も見えます。野原のはては、ぼおっと青白い霧のようです。ときどきさまさまな形の狼煙が、桔梗いろの空にうちあげられました。すきとおつ

た風は、ばらの匂でいっぱいでした。

川は二つにわかれました。真つ暗な島のまん中に高く組まれたやぐらの上に、寛い服を着て赤い帽子をかぶった男が立っていました。両手に赤と青の旗をもって空を見上げて信号しているのです。

ジョバンニが見ている間、しきりに赤い旗をふっていました。俄かに赤旗をうしろにかくすようにし、それから青い旗を高くあげて、オーケストラの指揮者のように烈しく振りましました。

すると、ざあつと雨のような音がして、何か真つ黒なものが、いくかたまりも鉄砲丸のように川の向うへ飛んで行きました。美しい桔梗色の空を、何万という小さな鳥どもがせわしなく通つて行くのでした。

二人の顔を出しているまん中の窓から女の子が顔を出して、頬をかがやかせながら空を仰ぎました。

「まあ、この鳥、たくさんですわねえ、空のきれいなこと。」

女の子はジョバンニに話しかけましたけれども、ジョバンニは、生意気だ、いやだと思つて、空を見あげていました。

女の子は小さく息をして席へ戻りました。カムパネルラは気の毒そうに窓から顔を引つ込めて地図を見ました。

「あの人、鳥に教えてるんでしょうか。」

「わたり鳥へ信号してるんです。どこからか、のろしがあがるためでしょう。」

カムパネルラがおぼつかなく答えました。車の中はしーんとなりました。ジョバンニはもう頭を引つ込めたかったですけれども、明るいとこへ顔を出すのがつらいので、だまつて口笛を吹いていました。

（どうして僕はこんなかなしいのだろう。もっとところもちを大きく持たなければいけない。向うの岸の静かな青い火を見て、心持ちをしずめるんだ。）

ジョバンニは熱つて痛いあたまを両手で押えました。

（どこまでも僕といっしょに行くひとは、いないのだろうか。カムパネルラは、あんなに女の子とおもしろそうに談している。僕はつらい。）

ジョバンニの眼はまた涙でいっぱいになり、天の川もまるで遠くへ行つたようにぼんやり白く見えるだけでした。

汽車はだんだん川からはなれて崖の上を通りました。向う岸の黒い崖が、川を下るにしたがつてだんだん高くなつて行くのでした。

ちらつと大きなとうもろこしの木が見えました。ぐるぐるに縮れた葉の下には美しい緑いろの大きな苞が赤い毛を吐いて、真珠のような実もちらつと見えました。

カムパネルラが「あれ、とうもろこしだねえ」と云いましたけれども、ジョバンニは気持がなおりません。野原を見たままぶつきり棒に「そうだろう」と答えました。

汽車はだんだんしずかになつて、小さな停車場にとまりました。正面の青じろい時計はかつきり第二時を示し、その振子はカチツカチツと正しく時を刻んでいます。

そして、遠くの野原の果てから、かすかな旋律が糸のように流れて来るのでした。

「新世界交響楽だわ。」

汽車の中では黒服の青年も誰もみんな、やさしい夢を見ているのでした。

(どうして僕は愉快になれないのだろう。どうしてこんなにさびしいのだろう。カムパネルラはひどい。女の子とばかり談しているんだもの。)

ジョバンニはまた両手で顔を半分かくすようにして窓のそとを見つめていました。

すきとおった硝子のような笛が鳴って、汽車はしずかに動き出し、カムパネルラもさびしそうに星めぐりの口笛を吹きました。

突然、黒い巨きな野原がいつぱいにひらけました。新世界交響楽はいよいよはっきり地平線のはてから湧きあがります。

「あら、インデアンですよ。インデアンですよ。ごらんなさい。」

まっ黒な野原のなかを、白い鳥の羽根を頭につけ、胸と腕を石で飾ったひとりのインデアンが、一目散に汽車を追って来るのでした。

黒服の青年も眼をさました。ジョバンニもカムパネルラも立ちあがりました。

「走って来るわ、走って来るわ。追いかけているんでしょ。」

「いいえ、汽車を追ってるんじゃないんですよ。猟をするか踊るかしてるんですよ。」

こつち側の窓を見ますと、汽車は高い崖の上を走っていて、谷底には幅ひろい川が、明るく流れていたのです。

どんどんどんどん汽車は降りて行きました。崖のはじめに鉄道がかかるときには川が明るく下へのぞけたのです。

ジョバンニはだんだんころもちが明るくなって来ました。汽車が小さな小屋の前を通ってその前にしよんぼりひとりの子供が立ってこつちを見ているときなどは思わずほうと叫びました。

室中のひとたちは半分うしろの方へ倒れるようになりながら腰掛にしっかりとしがみついています。

ジョバンニは思わずカムパネルラとわらいました。天の川は汽車のすぐ横手を激しく流れてちらちら光っていました。うすあかい河原なでこの花があちこちに咲いています。

十二 サソリの火と十字架

川の向う岸が俄かに赤くなりました。楊の木がまっ黒にすかし出され、天の川の波もちらちら針のように赤く光りました。野原に大きなまっ赤な火が燃やされ、黒いけむりは桔梗色の天をも焦がしそうでした。

「あれは何の火だろう。」

「蝸の火だな。」

カムパネルラが、また地図と首っ引きで答えました。

「あら、蝸の火のことならあたし知ってるわ。」

「なんだい、蝸の火って。」

「蝸がやけて死んだのよ。その火がいまでも燃えてるって、お父さんから聞いたわ。」

「蝸って、虫だろう。」

「ええ、虫よ。だけど、いい虫だわ。」

「いい虫じゃないよ。尾にカギがあつて、それで螯されると死ぬって先生が云った。」

「そうよ。だけど、いい虫だわ、お父さん斯う云ったのよ。むかし、バルドラの野原に一ぴきの蝸がいて、小さな虫を殺して食べて生きていたんですって。ある日、イタチに見附かって食べられそうになったんですって。一生けん命逃げたけど、とうとうイタチに押えられそうになったの。そのとき、蝸は井戸に落ちてしまったわ。どうしてもあがれなくて、溺れはじめたのよ。そのとき、こう云ってお祈りしたの、「ああ、わたしは今までいくつのものの命をとったかわからない。そのわたしがこんどは、イタチにとられそうになって一生けん命にげた。それでも、とうとうこんなになってしまった。どうしてわたしのからだを、だまってイタチに呉れてやらなかったろう。そしたら、いたちも一日生きのびたろうに。どうか神さま、この次はむなしく命を捨てずに、みんなの幸いのために私からだをおつかい下さい」って。そしたら、蝸は自分のからだが真っ赤な美しい火になって、夜のやみを照らしているのを見たって。「いまでも燃えてる」ってお父さん仰ったわ。あの火、それだわ。」

「そうだ。見たまえ。三角標がちようどさそりの形にならんでいる。」
向こうの三つの三角標はさそりの腕のように、こっちの五つの三角標は尾やかぎのようにならんでいます。さそりの火は音もなく明るく燃えています。

その火がだんだんうしろになるにつれて、にぎやかな樂の音や草花の匂いや口笛や人々のざわざわ云う声やらを聞きました。近くに町があつてお祭でもあるようでした。

「ケンタウル露をふらせ。」
いままで睡っていたジヨバンニのとなりの男の子が向うの窓を見ながらいきなり叫びました。

そこには、クリスマスストリイのようなもみの木が立って、たくさんの豆電燈が蛍の集つたようになっています。

「ああ、そうだ、今夜ケンタウル祭だねえ。」

「ああ、ここはケンタウルの村だよ。」

「もうじきサウザンクロスです。おりる支度をして下さい。」

「僕、もう少し汽車へ乗ってるんだよ。」

女の子は立って支度をはじめましたけれども、ジヨバンニたちとわかれたくないようすでした。

「ここで降りないといけないのです。」

青年はきちつと口を結んで男の子を見おろしながら云いました。

「いやだい。僕もう少し汽車へ乗ってから行くんだい。」

「僕たちと一緒に乗って行こう。僕たち、どこまでだつて行ける切符持つてるんだ。」

女の子がさびしそうに云いました。

「だけど、あたしたちここで降りないといけないのよ。ここ天上へ行くところなんだから。」

「天上へなんか行かなくなつていいじゃないか。ぼくたちここで天上よりもつといいところをこさえないといけないって僕の先生が云つたよ。」

「だつておつ母さんも行ってらっしゃるし、それに神さまが仰っしゃるんだわ。」

「そんな神さまうその神さまだい。」

「あなたの神さまうその神さまよ。」

「あなたの神さまうその神さまよ。」

「そうじゃないよ。」

「あなたの神さまってどんな神さまですか。」

「ぼく、ほんとうはよく知りません。けれども、たった一人の神さまです。」

「もちろん、神さまは、たった一人です。」

「ああ、そんなんでなしに、たったひとりのほんとうの神さまです。」

「だからそうじゃありませんか。わたくしはあなた方がいまに、そのほんとうの神さまの前でわたくしたちとお会いになることを祈ります。」

青年はつましく両手を組みました。女の子もその通りにしました。みんな別れが惜しそうで、顔いろも青ざめて見えました。ジョバンニはあぶなく声をあげて泣きそうでした。

「さあもう支度はいいですか。じきサウザンクロスですから。」

そのときでした。見えない天の川のずうっと川下に青や橙や、あらゆる光でちりばめられた十字架がまるで一本の木という風に、川の中から立ってかがやき、その上には青じろい雲がまるい環になって、後光のようにかかっているのです。

汽車の中がざわざわしました。みんなまつすぐに立ってお祈りをはじめました。あつちにもこつちにも、よろこびの声や深いためいきの音がきこえました。

「ハルレヤ、ハルレヤ」と明るく楽しく、みんなの声は響き、冷たい空の遠くから、すきとおったさわやかなラッパの声が聞こえました。

そして、たくさんのシグナルや電燈の灯のなかを、汽車はだんだんゆるやかになり、とうとう十字架の真向かいに行って止まりました。

「さあ、下りるんですよ。」

青年は男の子の手を引いて出口の方へ歩き出しました。

「じゃさよなら。」

女の子がふりかえって二人に云いました。

「さよなら。」

ジョバンニは泣き出したいのをこらえて、怒ったようにぶつきり棒に云いました。女の子はつらそうに眼を大きくして、も一度こつちをふりかえって、それからだまって出て行ってしまいました。

汽車の中はもう半分以上も空いてしまい、俄かにがらんとして、さびしくなり、風がいつばいに吹き込みました。

みんなはつましく列を組んで、十字架の前の天の川のなぎさにひざまずいていました。

ふたりは、白い着物を着た神々しいひとりの人が、手をのばしてこつちへ来るのを見ました。

けれどもそのときはもう、硝子の呼子が鳴らされ、汽車はうごき出し、と思ううちに銀いろの霧が川下から流れて来て、何も見えなくなりました。

そのとき、すうつと霧がはれかかりました。さっきの十字架は、すっかり小さくなつてしまい、そのまま胸にも吊されそうになりました。

ジョバンニは、ああと深く息をしました。

「カムパネルラ、また僕たち二人きりになったねえ、どこまでも一緒に行こう。僕は、

あのさそりのように、みんなの幸のためならば、僕のからだなんか百ぺん灼いてもかまわない。」

「うん。僕だってそうだ。」

カムパネルラの眼にはきれいな涙がうかんでいました。

「けれどもほんとうのさいわいとは一体、何だろう。」

「僕わからない。」

「僕たちしつかりやろうねえ。」

「あ、あすこ石炭袋だよ。そらの孔だよ。」

ジョバンニはぎくつとしました。天の川のひとこに大きなまつくらな孔がどおんとあいているのです。その底がどれほど深いか、その奥に何があるのか、なにも見えずに、ただ眼がしんしんと痛むのでした。

「僕もうあんな大きな暗の中だってこわくない。みんなのさいわいをさがしに行く。どこまでも僕たち一緒に進んで行こう。」

「ああきつと行くよ。ああ、あすこの野原はなんてきれいだろう。みんな集ってるねえ。あすこがほんとうの天上なんだ。あつ、あすこにいるの、ぼくのお母さんだよ。」

カムパネルラは俄かに、遠くに見えるきれいな野原を指して叫びました。

ジョバンニもそつちを見ましたけれども、そこはぼんやり白くけむっているばかりでした。

「カムパネルラ、僕たち一緒に行こうねえ。」

ジョバンニがふりかえって見ましたら、カムパネルラのすがたは見えず、ただ黒いビロードばかりが光っていました。

ジョバンニは鉄砲丸のように立ちあがりました。そして窓の外へからだを乗り出して力いっぱいはげしく胸をうって叫び、それから咽喉いっぱい泣きだしました。そこらが一ぺんにまつくらになったように思いました。

十三 水に落ちた子ども

ジョバンニは眼をひらきました。もとの丘の草の中に疲れてねむっていたのでした。胸は何だかおかしく熱り、頬にはつめたい涙がながれていました。

ジョバンニはばねのようにはね起きました。町はさっきのとおり、下でたくさんの灯を綴ってはいましたが、その光はなんだかさつきより熱したようでした。

そして、たったいま夢で歩いた天の川も、さっきのとおりに白くぼんやり空にかかり、その右には蠍座の赤い星がうつくしくきらめきました。

ジョバンニは一さんに走って丘を下りました。そして、町の通りのはずれに出ました。川にかかった大きな橋のやぐらが、夜のそらにぼんやり立っていました。

橋の上にも、いろいろなあかりがいっぱいでした。女たちが七、八人、町かどに集って、橋の方を見ながら何かひそひそ談しています。

ジョバンニはさつと胸が冷たくなったように思いました。

「何かあったんですか。」

「こどもが水へ落ちたんです。」

ジョバンニは夢中で橋の方へ走りました。橋の上は人がいっぱい、河が見えませんが、白い服を着た巡査も出ていました。

ジョバンニは橋の袂から飛ぶように河原へおりました。

水際に沿ってたくさんのあかりがせわしくのぼったり下ったりしていました。向う岸の暗い土手にも火が七つ八つ動いていました。もう烏瓜のあかりもない灰色の川が、しずかなゆ音をたてて流れています。

下流の州のところに、人の集りがくつきり黒く見えました。ジョバンニはどンドンそっちへ走りました。

すると、さつきカムパネルラといっしょにいたマルソに会いました。

「ジョバンニ、カムパネルラが川へはいったよ。」

「どうして、いつ。」

「ザネリがね、舟の上から烏うりのあかりを水の流れる方へ押してやろうとしたんだ。そのとき舟がゆれたもんだから水へ落っこつたろう。するとカムパネルラが飛びこんだんだ。そしてザネリを舟の方へ押してよこした。けれどもあと、カムパネルラが見えないんだ。」

「みんな探してるんだろう。」

「ああすぐみんな来た。カムパネルラのお父さんも来た。けれども見附からないんだ。」

ジョバンニはみんなの居る方へ行きました。青じろく尖ったあごをしたカムパネルラのお父さんが、町の人たちに囲まれて、黒い服を着て立っていました。そして、右手に持った時計をじつと見つめていたのです。

みんな、じつと河を見えています。誰も一言も物を云いません。

ジョバンニは足がふるえました。魚をとるときのアセチレンランプがたくさんせわしく行ったり来たりしています。黒い川の水がちらちら小さな波をたてて流れています。

下流には、川はばいばい銀河が巨しく写って、まるで水のない空のように見えました。ジョバンニは、(カムパネルラはもうあの銀河のはずれにしかない) という気がしました。

けれどもみんなは、カムパネルラが「ぼくずいぶん泳いだぞ」と云って、波の間から出てくるか、どこかの洲に流れ着いて待っているような気がするらしいのです。

けれども、カムパネルラのお父さんがきつぱり云いました。

「もう駄目です。落ちてから四十五分たちましたから。」

ジョバンニはかけよって、ぼくはカムパネルラの行った方を知っています。ぼくはいっしょに歩いていたので、と云おうとしましたが、のどがつまって何とも云えませんでした。

カムパネルラのお父さんはまた、銀河のいっばいにうつった川下へ眼を送りました。

ジョバンニはなにも言えず、胸がいっぱいになりました。そして、天に向かって心のなかで叫びました。

(カムパネルラ、僕はまた一人きりだ。でも、みんなの幸いのために僕は生きたい。それがいったい何なのか、まだわからない。けれども、みんなのために、みんなの幸いをさがしに行くよ。)

それから、ジョバンニは土手を駆け上がって、お母さんたちの住んでいる街の方へ向かって一目散に走り出しました。(終)